



## 赤十字の父 アンリ・デュナン 最終回

講談師 一龍斎貞花

明治十年西南戦争の時に、元老院議官佐野常民氏が博愛社を設立して、両軍の傷病兵を区別なく救護にあたり、

九年後の明治十九年ジュネーブ条約に調印、博愛社病院も設立され、翌年世界で19番目の赤十字社と正式に認められ日本赤十字となりました。現在世界192カ国が参加、赤十字のないのはわずか20数カ国だけ。国内だけでなく国際救援に看護師が派遣されています。

アンリは、赤十字五人委員会から身を引き、アルジェリアの事業をやり直すためジュネーブに戻ったが、借金は増えるばかり。屋敷、土地すべての財産を没収され、パリの下町に住み時々頼まれる代書の仕事で細々とした暮らし。38歳の若さながらまるで老人のよ

うにやつれ、記念すべきジュネーブ会議からわずか2年しかたっていない。

一八六七年万国博覧会がパリで開かれるや、会場の中央にアンリの胸像が飾られ、皇帝から金メダルを授与されたものの評判は悪くなる一方。

「借金で倒産し夜逃げした男が、赤十字の運動をするなんて……」

非難の声に、アンリは赤十字とのかかわりを総てやめざるをえません。

更に活動の推進者で、よき理解者であった最愛の母が亡くなり、ますます絶望の淵へと落とされていきました。

再び立ち上がったアンリ

一八七〇年、プロイセンとフランスの戦争の火ぶたが切って落とされ、ビ

スマルク率いるプロイセンは連戦連勝、砲弾の音がパリの町まで迫ってきた。

なんで黙っておられましょう。アンリの胸に情熱が蘇り、大切に持っていた赤十字の旗を取り出すと戦場目指して一目散。銃弾飛び交う中赤十字の旗を振りながら、

「撃つな、これは赤十字の旗だ、負傷兵を守れ！」

と、銃声はぴたりとやんだ。赤十字の条約は守られたが、負傷兵は何の手当もされず戦場に横たわっている。再びソルフェリーノの時と同じ大働き。アンリの赤十字の旗が翻ると戦いは中止され救護活動が始まる。看護に当たっていた医者一人が、

「あなたは赤十字のことをよく知っていますね。パリの赤十字の指導者カストネル夫人はいつもアンリ・デュナン

のことを話してくれます。私もメンバーの一人で、アンリさんのかいた『ソルフェリーノの思い出』を読み感動しました。あなたはその本を読みましたか」

「ハ、ハイ……」

「こんな危険な戦場で、赤十字の旗をかかげて活動する人がいることを知ったら夫人はどんなに感激されることでしょう。どうかお名前をお聞かせ下さい。夫人にあなたのことを伝えたいと思います」

「いえ、私は名乗るほどの者ではありません」

その年パリは陥落、赤十字の旗を振って戦火に逃げ惑う市民たちを救護する活動に、子供たちから「赤十字のおじさん」と、あだ名をつけられたほど。

やがて赤十字のおじさんが、アンリ・デュナンであることを知ったカストネル夫人は、貧民街で寂しく暮すアンリを見て、

「あなたのような素晴らしい方が、こんなに苦労されているとは思ってもみませんでした。どうか私に援助させて下さい」

資産家の夫人は、アンリの借金を払ってくれたばかりか、家まで与えてくれました。家賃がたまりアパートから追い出されようとしていたアンリはどんなに助かったことか。

アンリは再び社会活動に乗り出したが、

「あれは金持ちの貴婦人をだまして、金を巻き上げているペテン師だ」

そんな中傷や誤解のため、スイスのバイデンという小さな町に移ったアンリは胃を患い、体中に出来た湿疹に苦しみ寂しい日々を送るアンリに、追い打ちをかけるように、カストネル夫人が亡くなり、益々元気を失っていくばかり。

### 第一回ノーベル平和賞

アンリは世間からすっかり忘れられ、

「死んだ」とさえ思われていましたが、スイスのあるジャーナリストが、偶然福祉病院で生きていることを発見、白いひげをはやし、赤いガウンを着た目のするどい老人が、アンリ・デュナンであることを確かめるや、全世界に向けて、

「赤十字の父アンリ・デュナンが生きていた。ただ生きていただけではない。戦争に反対し平和を訴える論文を書いていた」

アンリは、最後の情熱を振り絞って「血と涙の将来」という本を書いていたのです。

このニュースを知った各国の元首から、続々とお見舞いの手紙が届けられた。そして七十三歳の時、アンリ・デュナンに第一回ノーベル平和賞が贈られました。

アンリはこの賞金の一部を、赤十字国際委員会に寄付。

八十歳の誕生日には、世界中からお祝いの言葉や花束が贈られました。

福祉病院のベッドに横たわるアンリの楽しみは、慰問に訪れる子供たちと会うことでした。

子供たちの可愛い歌に目を細めて聞きながら、昔幼かった頃お母さんと二

人で、孤児院や養老院を訪れた時のことを思い出していたことでしょうか。

一九一〇年、明治四十三年十月三十日、わずかな人に看取られながら八十三歳の生涯を閉じたのでございます。

この年の八月、ナイチンゲールも亡くなっています。

人類愛のために生涯をささげたアンリ・デュナンが、これほど有為転変の日々を送らねばならなかったとは。

それにしても発足当初の五人委員会の人たちは、アンリのその後を手を差しのべなかつたのでしょうか。

一八六三年（文久三年）十六カ国の代表が出席した第一回国際会議。

「戦場で敵味方の区別なく、負傷兵や傷ついた市民を助ける国際組織の誕生、これこそ人類愛にもとづくものであり、その旗のあるところ総ての戦争は中止され、救護活動がはじまるでしょう」

白地に赤の赤十字の旗にちなんで名称も「赤十字」と決定した後に、提案者のアンリは書記をつとめ、新聞記者から、

「あなたがこの赤十字を作るために努

力されたんですよ。あなたは赤十字の創立者です」

「イエ、私は創立者でも何でもありません。赤十字の創立者は各国の心ある人々総てです。私はほんの少しお手伝いをしただけです。人間は一人ひとりでは弱いものですが、同じ目的を持って集まると、素晴らしい力を発揮することが出来るんです」

翌年、赤十字の規約が作られ、十二カ国が調印、国際赤十字組織誕生の記念すべき国際会議には、法律家のモアニアが会議の実権を握り、アンリは接待係でしかありませんでした。

金を使い結成に奔走したアンリが、俺が提案者だと主張したら、仲間割れし発足が遅れたかもしれません。

しかしその死後は、赤十字生みの親として世界中の人々から慕われているのです。毎年五月八日アンリの誕生日を記念して世界赤十字デーの行事が行われ、世界中が赤十字の精神、人類愛の尊さをかみしめ平和を祈ります。

或る時は情熱を燃やし、また或る時は人々の誤解に苦しみ、失意のどん底に落ちながらも、人類愛の旗を掲げ続けました赤十字の父アンリ・デュナンの一席を申し上げました。